



上/北上川で助けられたサエコが父親と対面するシーン  
 中/熱の入ったリハーサルで演技指導を行う岩淵憲昭さん  
 下/主人公サエコのモデル、千葉貞子さん  
 右/クライマックスの、復興への願いを込めて市民が踊る場面



# 体験を伝える 伝

## 大成功の市民ミュージカル 力強い歌声にのせて あの体験を多くの人の心に届ける

カスリン台風の大被害から60年が経ち、当時のことを知る人は少なくになりました。災害に強い地域づくりを進めるためにとても大切なのが、災害体験を語り伝えること。このことが過去の教訓を生かした、未来への備えにつながっていくのです。

水害体験を風化させないためのさまざまな催しに力を入れています。同館ではカスリン・アイオン台風の体験者がボランティアガイドとして「語り部」を務めているほか、写真展、水害体験を語る催しが数回にわたり行われてきました。阿部榮男事務局長は「災害時の行動は、過去に経験した人から教えられることがたくさんある。一関の水害の歴史を学ぶ場として、大いに施設を活用してほしい」と呼びかけます。

川崎町では7月7日、子どもたちがカスリン・アイオン台風を体験した地域の人から当時の状況を聞く催しが、



上 水害体験を語る催しが行われているあいぼーと  
 中 川崎町で水害体験者が子どもたちに語りました  
 下 一関商工会議所では水害の被害を伝えるDVDを製作し配布

ホテルについて学ぶ「ほたる探偵団」活動の一環として行われました。同町門崎の葛西信一さんが語り部を務め、カスリン台風で自宅が浸水し、北上川を人や家が流される様子を見た体験者、子どもたちに図面で示しながら語り聞かせました。

伝える手段として、映像の力は大きなものがあります。一関商工会議所(宇部貞宏会頭)は同会議所創立60周年を記念し、水害被害と復興の様子を伝えるDVD「水が伝える物語」カスリン・アイオン台風の思い出」を作成しました。両台風の様子を写真と水害体験者の証言を交えて、堤防工事、一関遊水地事業や今後の防災体制の課題も紹介。DVDは関係機関のほか、市内すべての小・中学校に配布されます。

### 「水害の悲惨さを伝えたい」 写真集「一関の年輪」を刊行

水害被害の悲惨さを広く知らせることに大きな役割を果たした一冊があります。市内のアマチュア写真家、故横田實さんが収集・撮影した写真に資料、インタビューなどを交えた「一関の年輪」(同刊行委員会発行)です。平成2年に刊行されたこの写真集は、明治から現代まで、一関が移り変わる様子を写真で紹介。そのうち約7分の1をカスリン・アイオン台風の被害とその復興の様子などで占めています。

「何といつても、写真は文章よりインパクトがあるから」と永澤卓三代表。横



「一関の年輪」刊行委員会代表の永澤卓三さん

田さんの写真展を見て、この写真を世に出したいと刊行委員会を立ち上げました。発刊後は「思った以上の反響。子や孫たちとあまり会話のなかったお年寄りだが、この本を見ながら生き生きと会話できるようになったと聞き、やってよかったと実感した」と語ります。

12年には、2冊目となる「一関の年輪Ⅱ 20世紀の一関」を刊行。現在同委員会は横田さんの遺した写真とネガをデータベース化し、「未発表の写真と、現在撮りためている写真で、3冊目を2010年に発行したい」。一関の歴史を記録する年輪は、今も刻まれています。

### 復興を遂げた市民の物語に 1600人が涙で見入る

アイオン台風により磐井川が決壊した日と同じ9月16日、市民ミュージカル「今伝えよう一関の年輪」が一関文化センターで上演されました。「みんなミュージカル実行委員会」(畠中良之委員長)が主催。6歳から73歳までの約50人の熱演に、時に涙を浮かべながら鑑賞した観客は、惜しみない拍手を送っていました。

昔の人が、あの水害の後に今のこのまちを作り上げたことはすごい」とにっこり。市出身の俳優で賛助出演、演出を務めた岩淵憲昭さんは「全国さまざまな都市で市民ミュージカルに携わったが、今回は地元ならではの思い入れがあった。今は言葉にできないぐらいの感激と、誇らしさでいっぱい」と語りました。

「演技も歌も素晴らしかった。このような試みが続けられることで、子どもたちに水害の恐ろしさを伝えられるのでは」と鑑賞した50歳代の女性。15日夜の小学生と水害体験者向けの招待公演を鑑賞した佐藤仁泉さん(山目小5年)は「水害のことは学校で勉強した。ミュージカルは去年も見たが、今回も歌や踊りで楽しめた」と話しました。

「舞台をきっかけに台風の記憶を多くの人に伝え、議論する機会を持ってもらえれば」と畠中委員長。サエコのモデルとなった千葉貞子さん(67)「宮前町Ⅱは昔は、あの記憶に触れられなくなかった。年齢を重ねるうちに、あの体験が忘れ去れてしまうと危機感が出てきて」と、自らの体験を話すようになってきた。

2回の公演を合わせた観客は約1600人。市の人口からすると1000人に一人以上の人が舞台を見たことになりました。大切な人を失うつらさ、悲しさは時代が変わっても変わらないミュージカルを通して、そのことが改めて多くの人の胸に刻まれました。